



症候別 “見逃してはならない疾患”の 除外ポイント

The 診断エラー学

徳田安春 編

● A5・頁 352 2016 年 3 月

定価：本体 4,400 円＋税

[ISBN978-4-260-02468-6] 医学書院刊

今の医学は過去の失敗の積み重ねから成り立っている。

「自分が下した診断のもと帰宅させた患者が、翌日別の診断で入院した」という経験は、多くの医師が経験したことがあるのではないだろうか。しかも、その経験は何年経っても忘れられない記憶となり、部下の指導で最も強調しているのは、このような失敗が大きく影響しているからであろう。診断エラーがなぜ起きてしまい、どのように対処したらよかったかを共有することができれば、患者の不幸を回避できるだけでなく、難解な疾患の診断への近道となる。

本書は診断学ではなく、「診断エラー学」を主眼とした新しい視点で症候別に述べられている。コラムだけを通読すると、編者の診断エラー学への思い、診断エラーが開示されにくかった背景、さらには人工知能(AI)まで見据えた「診断エラー学」の必要性まで述べられている。

本書の最大の特徴は、共著の良さを最も生かしていることである。臨床現場で実践と指導に当たる第一線の臨床家のパールが散りばめられている。症候に合わせた“見逃せない疾患”の解説が述べられているが、同じ疾患でも、社会的影響の強い疾患に関しては繰り返し記載されている。例えば「肺塞栓症」という疾患の

解説は、「一過性意識障害」「浮腫」「失神」「胸痛」「咳・痰」「呼吸困難」の6項目で、それぞれ違った著者によって言及されている。“見逃せない疾患”は繰り返し出てくるので、その疾患の重要性が伝わり、それぞれの著者の微妙な考えの違いも現場に近い感覚で読むことができる。したがって、本書は困ったときに開くのではなく、ぜひ通読することをお勧めする。

もう一度強調するが、本書は診断学の本ではなく、「診断エラー学」の本である。診断ではなく、“見逃せない疾患”を病歴、身体診察、検査で“いかに除外するか”に注目し、診断エラーを防ぐ方法がまとめられている。また、「見逃すとどの程度危険か？」という提示は、各著者の疾患への思いが透けて見える内容となっている。

診断エラー学についてはこれまで、ほとんど述べられることがなかった。見逃すと致死的になる疾患は、過去の統計学的なエビデンスに頼るだけでは診断エラーを防ぐことはできない。経験豊富な臨床家の生の声(特に失敗経験)を聞くことが非常に重要である。この視点は、指導医にとって最も強調されるべき事項でもある。

目の前の患者の「診断エラー」を一つでも防ぐために、初学者から指導医までぜひ一読をお勧めする。